

あり、また、養魚池などでは魚をとった後、またすぐに水を溜めてしまう池もあって水生植物は減少の一途をたどっている。

池全体として見たとき水生植物の豊富な溜池は黒田の古池や長川の綿打池であった。前者ではジュンサイ、ヒツジグサ、ノタヌキモ、イヌタヌキモ、ヒシ、ハス、ヨシ、マコモなど、後者ではガガブタ、ヒツジグサ、ヒシ、マコモ、エゾミソハギなどが池一面に生育している。

町内で見られた保護すべき重要な水生植物を表1—5にあげた。オオバシナミズニラ、ミカワタヌキモ、ヤナギスブタなどは福岡県としての最重要保護植物であり、オニバス、ガガブタ、カワヂシャなども環境省の指定した絶滅危惧種である。オニバスは唯一、箕田大池に生育している。二つに分かれた池の先端部に群落を形成しており、カワヂシャは長峡川の上流域に見られる。ジュンサイは町内でも若芽を食用に採取していたといわれ、ヒツジグサも貴重な存在である。

調査のおり、亀田池の土手にタヌキマメ、新池ではミソナオシ、中尾池ではムカゴニンジン、原田大池ではスズメウリといった希少な植物が見られた。しかし、長峡川水系ではホテイアオイの群落がみられるくらいで特筆すべき植物は存在しない。

六 保護上重要な植物

保護上重要な植物として一七種をあげた。その中でノタヌキモ、オニバス、ミズオオバコ、ホソバオグルマは福岡県絶滅危惧ⅠB類、ガガブタ、キキョウ、ヒメヒゴタイ、キセワタは絶滅危惧Ⅱ類、カワヂシャは準絶滅危惧、キツネノカミソリは情報不足種である。

ジュンサイ きれいな水に生える多年生の浮葉植物で黒田（スイレン科）の古池など三つの溜池にある。葉身は切れ込みのない楕円形で葉柄は楕状につき葉の裏面は赤紫色。若芽や葉柄などに透明な粘液質の分泌物があり、摘み取って食用にされる。古池では昔、舟を浮かべて採っていたと聞く。花は六



写真1—18 ジュンサイ



写真1—19 ガガブタ

八月に咲くが小さくて目立たない。水質の悪化で減少している。

ガガブタ

山間部の溜池にまれに生育する多年生の浮

(ミツガシワ科)

葉植物。細くて長い茎があり、先の方に葉

をつける。葉はふつう長さ七〜一五センチの心形。花期は七〜九月。花は葉柄の基部に多数集まってつき、一日にほぼ一個の割合で開花する。花は径約一五ミリ、車形に五深裂し、白色で裂片の縁と内面とに長い毛がある(絶滅危惧Ⅱ類・福岡県)。

ノタヌキモ

(タヌキモ科)

山間部の溜池にまれな食虫植物で水面近くに浮遊している。町内では黒田の二又池など四

つの池に生育している。茎は分枝して一・五メートルに達し、葉は糸状で基部で三つに分かれ、それぞれが更に立体的に分かれる。

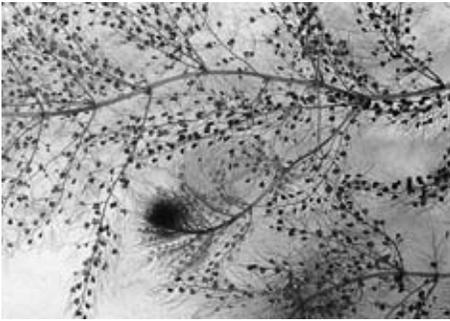


写真1—20 ノタヌキモ



写真1—21 ミズワラビ

葉の全体の長さは三〜五センチで多数の捕虫囊をつけている。花期は九〜十月で長さ五センチあまりの花茎上に数個の黄色の花をつける(絶滅危惧ⅠB類・福岡県)。

ミズワラビ

水田の中や湿地に生える一年生の珍しい

(ホウライシダ科)

シダ植物で直立又は斜上している。ふつ

う高さは五〜一五センチであるが三〇センチに達するものもある。葉には栄養葉と胞子葉とがあるが、どちらも羽状複葉で細かく切れ込み、サンゴのような形をしている。体はうすい緑色。上野や松田の水田や水の溜まった休耕田に見られた。

カワヂシャ

山間部や山麓部の水田の側溝や小川の水

(ゴマノハグサ科)

辺などに生える越年草。長峡川その他の

水のきれいな上流部に見られる。茎は直立して高さ二〇〜五〇

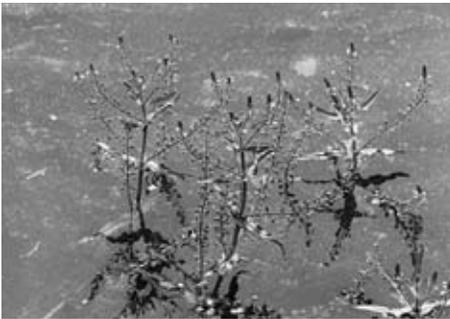


写真1—22 カワヂシャ



写真1—23 ヒツジグサ



写真1—24 オニバス



写真1—25 ミズオオバコ

はまばらで柔らかく中空。葉はまばらに対生につき基部で茎を抱き縁にはあらいぎさぎさがある。花期は四〜五月で葉腋から細くて長い花序を出し、小さな花を多数つける。若いうちは食べられる（準絶滅危惧・福岡県）。

ヒツジグサ

山間部の溜池にごくまれに生育する多年生の

(スイレノ科)

浮葉植物。沈水葉と浮葉があり、浮葉は卵形

ないし楕円形で、基部は深く切れ込み側裂片の多くは左右に離れて広がり、長さは八〜一五センチ、裏面は紫色。花期は六〜一〇月で花の径は五〜七センチ、花弁は白色。午後になって開花するので「未草」の名がある。池田地区など二つの溜池で確認された。

オニバス

箕田の大池の二か所に群落がある。しかし、

(スイレノ科)

東側では池に樹木が差し出し生育を妨げている。一年生の大形の浮葉植物で、葉は径一センチにも達し、表面には突起状のしわがあり、裏面は紫色で葉脈が格子状にひどく隆起している。両面とも脈上にするどい刺がある。花には水面で

開く開放花と水中で結実する閉鎖花がある。開放花の花弁は紫色（絶滅危惧I B類・福岡県）。

ミズオオバコ

長迫池に生育する沈水性の水草。一年生で

(トチカガミ科)

あるために年により増減がある。葉はオオ

バコ形で大きく長さ三〇センチ、幅一五センチ以上にもなる。葉は薄く、しかも硬いため破れやすい。花期は八〜十月、花は水上に咲くため花茎は水深により一メートルを超えるものがある。花弁は円形の三個からなり非常に薄く、白色かごく淡い紅色である（絶滅危惧I B類・福岡県）。

タムシバ

コブシによく似た高さ数メートルの落葉樹、葉はコ

(モクレン科)

ブシより細長で裏面が白い。枝や葉に芳香が

ある。花期は三月下旬で花は三枚の小さな萼と六枚の白色の花弁からなる。もともとやや気温の低い北方に多い植物であるが、県内では添田町や川崎町などの低山地にも多く見られ、本町では障子ヶ岳や仲哀山地をはじめ、特に凶師の山地に多い。

ミヤマシキミ

本町にあるミヤマシキミの仲間の大半は茎の

(ミカン科)

下部が地面を這ったあと斜上して高さ三〇〜



写真1—26 タムシバ



写真1—27 ミヤマシキミ

六〇^種になるツルミヤマシキミ(別名ツルシキミ)であるが、仲哀山地には茎は地面をはずさず高さ約一^尺になるミヤマシキミが生育している。常緑樹で葉は厚く光沢がある。四〜五月に枝先に三角形の花序をつけ、花弁は四枚で白色、果実は赤く熟す。

キキヨウ

山地草原に生える多年草。障子ヶ岳の山頂部

(キキヨウ科)

には多数生育していたといわれるが、現在は数株が残るだけになっている。人が株ごと採取したことやススキやセイタカアワダチソウなどの背丈の高い植物が茂りすぎたのが減少の要因と思われる。秋の七草の一種で、花期は七〜八月。花は茎の上部に数個つき、径三〜四^{センチ}で青紫色(絶滅危惧Ⅱ類・福岡県)。



写真1—28 キキョウ



写真1—29 スズメウリ

スズメウリ

湿気が多い林縁や水辺などに生える一年生のつ

(ウリ科)

る植物で原田中池の土手にエゾミノハギなどと

ともに生えていた。つるは細く他の草や樹木にからまって伸びる。花は小さく白色で径約六^釐。果実は卵形又は球形で長い柄にぶら下がり、はじめ緑色であるが熟すと白色になる。長峡川などにはこれによく似たゴキヅルがたくさんある。

ホソバオグルマ

日当たりよくやや湿気のある場所に生える

(キク科)

多年生の草本。茎は高さ四〇〜六〇^{センチ}、細

くて丈夫。葉は幅の狭い披針形で表面はざらざらしており、基部はなかば茎を抱く。花期は八月上旬で、花時には根出葉や茎の下部の葉は枯れている。茎の上部で分枝してそれぞれの先に頭花をつける。花は黄色で径一・八〜二・五^{センチ}、舌状花は一列

で花弁は細くて長い。宇田川の流域に生育する（絶滅危惧ⅠB類・福岡県）。



写真1—30 ホソバオグルマ

キツネノカミソリ 林下に極めてまれな多年草。山地で見か（ヒガンバナ科） けるこの仲間の多くはオオキツネノカミ



写真1—31 キツネノカミソリ

ソリである。葉の幅は一センチ以下で狭く、早春に伸び出し、五月下旬に枯れる。花期は八〜九月で花茎は三〇〜五〇センチ、三〜五個の花がつく。花披片は褐色で六本のおしべはオオキツネノカミソリと違い、花披片より長く外に突き出すことはない（情報不足・福岡県）。

ヒメヒゴタイ 日当たりのよい山地草原に生える越年草で他（キク科） の草があまり茂っていない所を好む。町内では平尾台の鉾山一帯に見られるだけである。茎は直立して五〇

〜一五〇センチ、上部で分枝して多数の頭花をつける。花期は八〜十月、頭花は明るい紫紅色で多数の小花の集合体。総苞片にも紫紅色の付属体があるので蕾のうちから美しい（絶滅危惧Ⅱ類・福岡県）。



写真1—32 ヒメヒゴタイ

キセワタ 山地草原や林縁部にまれに生えるやや大形の多年（シソ科） 草で茎は四角形、直立して高さ五〇〜一〇〇センチ。葉は対生し、狭卵形で鋸歯があり、表面はざらざらしている。花期は八〜九月、花は葉腋に数個ずつ集まってつき、紅紫色でオドリコソウに似ている。花冠は唇形で外面には白毛が多く、下唇の中央裂片の先は下に折れ曲がり濃紅紫色（絶滅危惧Ⅱ類・福岡県）。



写真1—33 キセワタ



写真1—34 ミツバベンケイソウ



写真1—35 ヒモヅル

ミツバベンケイソウ イワシデ林の林下に生える多年草で茎（ベンケイソウ科）の高さは三〇〜六〇^{センチ}、多くは斜上している。好石灰地植物で生育は石灰岩地に限られている。葉は名前からすると三輪生と思われるが、実はほとんどが対生で、時に三輪や四輪がある。花は九〜十月に咲き淡い緑白色（絶滅危惧 I B 類・福岡県）。

ヒモヅル

（ヒカゲノカズラ科）

勝山町に隣接する行橋市御所ヶ谷に自生する珍しい常緑のシダ植物。福岡県で唯一、日本の最大の群生地^{（約五ヘクタール）}にわたって分布している。茎の主軸はつる状に長く伸び、はじめ地面を這い、のちに立ち上がってコナラを中心とする樹木によじのぼり、高さは七^{メートル}に達するものがある。小枝は分枝して垂れ下がる。胞子のう

穂は細長い円柱状で径約三^{センチ}、長さ一・八〜四^{メートル}、小枝の先に一〜三個上向きにつき黄緑色（絶滅危惧 I B 類・福岡県）。

七 勝山町の大木

町内のかつての自然林は一九四〇年代から五〇年代にかけて伐採されたために山地には大木はほとんど存在せず、平野部に散在する古墳や神社の森に多少残っているにすぎない。全国的な傾向であるが、本町でも昔から大切に守られてきた鎮守の森の一部又は全部が近年伐採されてスギやヒノキの人工林に置きかえられているのは残念なことで、おそらくかなりの数の大木が伐採されたことであろう。

現在、大木がまとまって存在する個所は箕田の扇八幡古墳や御手水の大祖神社などで、前者ではツブラジイやイチイガシ、後者ではクスノキやツブラジイなどが見られる。

ふつう、幹の地上一三〇^{センチ}の所の周囲が三^{メートル}以上のものを巨木と呼び、五^{メートル}以上のもは特に巨樹と呼ぶことがある。町内の巨木は表1—6に示したとおりであるが、町内を隈なく調査したとは言い難く、他に何本かの巨木があるものと思われる。幹の周囲が五^{メートル}を超す巨樹は上矢山のムクノキと宮原のヤマザクラだけであるが、ほかに巨木に該当する樹木は六種、一〇本が発見された。また、あまり大きくないが珍しい樹木として上矢山のケンボナシをあげることができる。